

啓発活動(地域教育、都市農村交流)による「からむし(和苧)」の地域資源としての飛躍

まちづくりユニット ドーヴ (doobu) ・代表・永野 聡
新潟県からむしネットワーク・代表・村山 好明

1. はじめに

1.1 背景と目的

織物の一大産地であった十日町において、「からむし(和苧)」は地域由来の歴史的素材である。近年では、「からむし(和苧)」は、織物以外での活用方法(食品、芸術作品、等)に関して注目度を増加している。それは本「からむし(和苧)」の啓発活動が、地域資源として地域内外の人々に浸透してきている事を意味している。この好循環を未来永続的なものへと発展させなければならない。そこで、「からむし(和苧)」を地域産業としてより発展させる必要がある。また、その地域産業の主たる人材は次世代(担い手)である。そこで、地域学習を通じた担い手育成の活動を実施する。その一方、都市部から地方部への定住化を促進する意味でも、I・J・Uターン者の確保を加味し、都市農村交流の活動も積極的に実施する。

なお、「からむし(和苧)」に関する詳細説明は、前年度の報告書にて記載しているため、本報告書では割愛する。

1.2 十日町市伊達地区・水沢地区

十日町駅から南方5kmの場所に、対象地域となる伊達地区・水沢地区が位置している。地形的な特徴は、河岸段丘の中腹(魚沼丘陵と信濃川の間)を構成している。最寄り駅はJR飯山線の土市駅、関越自動車の塩沢石打ICから車で30分の場所となる。

2. 研究概要

2.1 「からむし(和苧)」の啓発活動

地域資源である「からむし(和苧)」の更なる啓発活動として、地域住民や地域外在住者へのワークショップ(「草木染めワークショップ」)を開催する。特に、地域づくりの担い手育成の観点より、十日町市の伊達地区・水沢地区に在住する小中学生(保護者の参加も可)を対象として、地域学習(地元学)の場を提供する。そして、関西在住の染色家を講師として招聘し、「草木染め」に関する技法の研究開発を行う。

また、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015」において、「まちづくりユニット ドーヴ (doobu)」名義で「からむし(和苧)」の布を展示したアート作品:「からむしの部屋 project」を製作する。この作品を通して、来場者へ「からむし(和苧)」の歴史的背景や現代的価値を付加した表現方法などについて説明し、「からむし(和苧)」に関する一層の啓発を実施する。

さらに、多様な角度から「からむし(和苧)」に対する価値の向上を図るため、東京在住の茶の湯の専門家(表千家講師)とコラボレーションし、「からむしの部屋 project」を舞台とした茶会を開催する。

2.2 「からむし(和苧)」の地域産業としての検討

地域産業の創出に向けた検討に関しては、多主体と連携し、地域ブランディングの創出へ向けた活動の展開を模索する。

また、「まちづくりユニット ドーヴ (doobu)」は、これまでに「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2012」においてアート作品:「からむしの部屋project」を出展しており、多くの観光客(地域内外)を集客している。また、芸術祭会期中には、プロダクトデザインの試験的取組みとして、グッズ販売も行い好評を得ている。「まちづくりユニット ドーヴ (doobu)」は、「大地の芸

術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015」への継続した出展を実施する。そこで、プロダクトデザインの更なる可能性を検討するため、グッズ販売も継続実施する。その際には、様々な素材（布、皮、木、等）を使い、地域ブランディングの可能性を模索する。

2. 3 研究活動の実施体制とスキーム

本研究活動は、「新潟県からむしネットワーク」を核として、地域内外の多様な主体を有機的につなぎ合わせ、地域資源「からむし（和苧）」のさらなる飛躍を目指す「多主体連携型によるプロジェクト連動型事業」と位置づけている。（図1）

また、「からむし（和苧）」を地域ブランドとして発展させ、I・J・U ターン者の確保という地域課題も加味し、中長期的な視点に立った地域の担い手の育成を図っていく。

そして、協働団体でもある「まちづくりユニットドーヴ（doobu）」は、定期的に活動拠点である十日町市を中心として、地域の会合や行事に参加し、地元との交流を深め、地域内での協働者の確保する活動を実施する。これにより、地域内の協力体制が強固なものとなる。

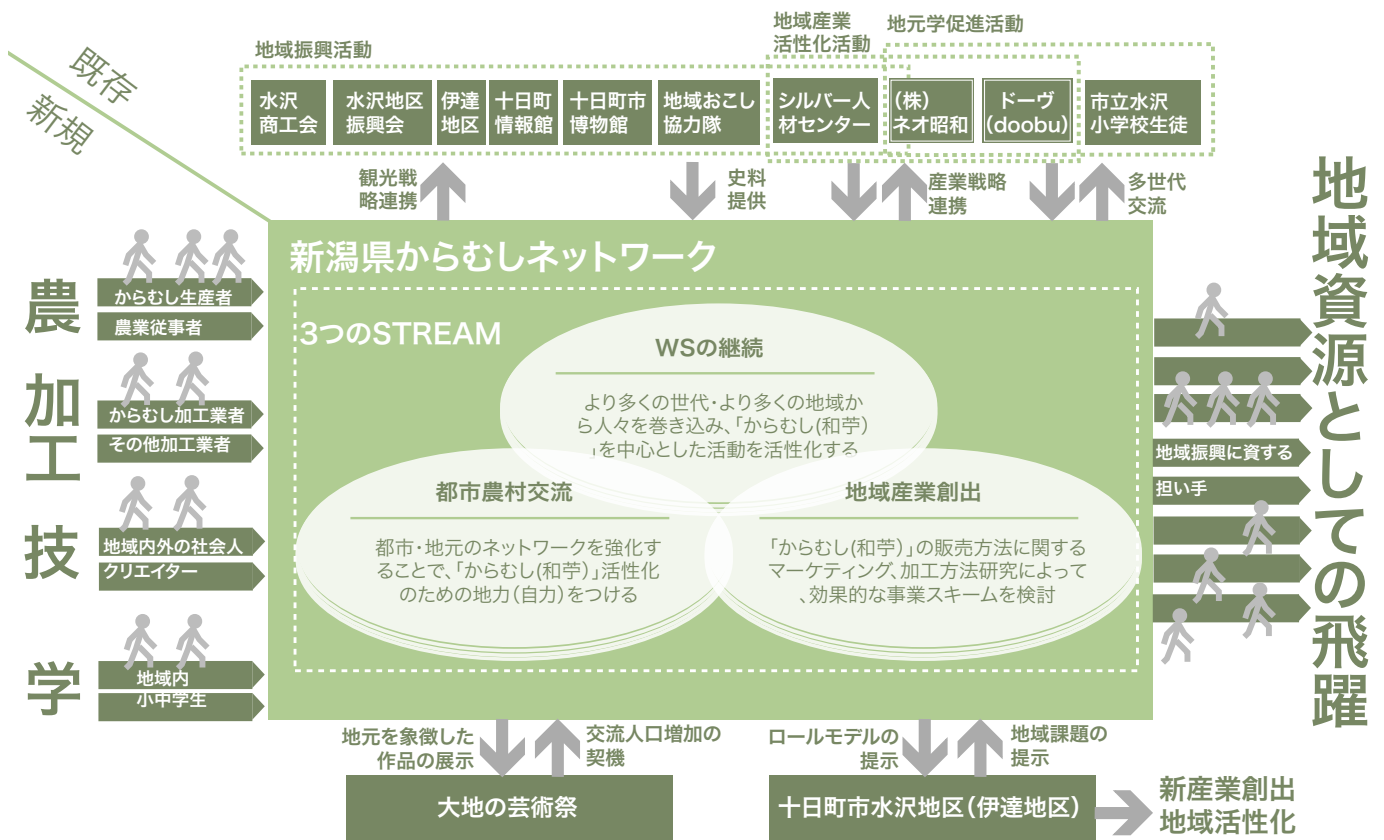


図1: 多主体連携によるプロジェクト連動型事業

3. 実施内容と結果

3. 1 「からむし（和苧）」をはじめとした地域資源を再発見するワークショップの開催

《実施期間：2015年4月～2016年3月》

○第1回ワークショップ

開催日時：5月9日（土） 13:00～17:00

開催場所：東京都杉並区某所

参加人数：8人（スタッフ3人、都内からの参加者5名）

開催概要：東京在住の染色に興味がある参加者（大学生、大学院生、社会人）に対して、「からむし（和苧）」の普及啓発と染色方法の指導を行った。はじめて「からむし（和苧）」に触れる参加者が多く、伝統素材を通じた地域を知る機会を創出した。また、7月より9月まで開催される「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015」への参加告知も実施し、実際に数名の参加を得る事となった。（写真1）

○第2回ワークショップ

開催日時：6月7日（日） 13:00～17:00

開催場所：新潟県十日町市伊達公会堂

参加人数：12人（スタッフ4人、地元参加者5人、都内からの参加者3名）

開催概要：十日町市の在住者を対象とした「地域学習に関するワークショップ・草木染めワークショップ」を開催するにあたり、前日開催された「伊達つつじ原祭り」で採取した「つつじ」と自生している「シソ」を新たな染料として表現方法を模索した。「からむし染め」を「草木染め」へと発展させ、地域に根付いた素材を活用する試験的取組みを実施した。

○第3・4・5・6回ワークショップ

開催日時：8月2日（日）23日（日）9月13日（日） 全日 13:00～15:00

開催場所：新潟県十日町市伊達地区「からむしの部屋project」

参加人数：延べ30人（スタッフ5人、来訪者25人）

開催概要：大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015への来訪者を対象に、「からむし（和苧）」で作られた作品展示空間とともに「からむし（和苧）」の知識の指導と、染色の指導を行った。

○第7回ワークショップ

開催日時：9月20日（日） 13:00～17:00

開催場所：新潟県十日町市産業文化発信館

参加人数：20人（スタッフ3人、来訪者17人）

開催概要：他団体の「野良キャンプ実行委員会」主催の「たからさがしカーニバル」にて、染色の技術講師として草木染めワークショップを開催した。ウコン・シソを用いて祭参加者に対して「からむし（和苧）」の啓発を実施した。

○第8回ワークショップ兼新しい地域資源の材料検討会

開催日時：3月6日（日） 13:00～15:00

開催場所：新潟県十日町市伊達地区

参加人数：6人（スタッフ2名、地元参加者3名、都内からの参加者1名）

開催概要：伊達地区の小学生と都内で芸術活動を行うデザイナーを対象に、「からむし（和苧）」とキハダを染料として、「地域学習に関するワークショップ・草木染めワークショップ」を開催した。また、ワークショップ後には地元協力者との会合に参加し、染色技術をもとに次年度以降の活動内容について提案を行い、「からむし（和苧）」のみならず活用できる地域資源の材料検討会を行った。

3. 2 「からむし（和苧）」を使った地域学習ワークショップの開催

《実施期間：2015年4月～2016年2月》

○「草木染めワークショップ」

開催日時：7月4日（土） 10:00～12:00

開催場所：十日町市市立水沢小学校

参加人数：53人（スタッフ10人、水沢小学校3年生33人、教諭・保護者20名）

開催概要：水沢小学校3年生の「総合的な学習の時間」を活用して、地域資源である「からむし（和苧）」に対する理解を深める活動（草木染めワークショップ）を実施した。また、その事前学習として、小学生は「からむし（和苧）」と十日町の歴史的な繋がり等を理解させた。2016年2月には、水沢小学校主催で地域学習に関する発表会を実施した。これら活動が地域外より注目を集め、11月には、神奈川県内の学校教諭の視察を受ける結果となった。

3. 3 「からむし（和苧）」の地域産業としての展開を検討（地域ブランディング会議、プロダクトデザインの検討）

《実施期間：2015年6月～2016年3月》

○「からむしの部屋project」を使った「世界茶会」の開催

開催日時：8月29日（土） 17:00～21:00

開催場所：新潟県十日町市伊達地区「からむしの部屋project」

参加人数：22人（スタッフ2人、地元在住者20人）

開催概要：これまでワークショップや作品展示、地域行事への参加を実施してきた中で、地域資源としての飛躍には「からむし（和苧）」だけではなく、ツツジやウコンといった天然染料や他の素材を、多層的かつ複合的に取り扱い、プロモーションしていく必要性をスタッフ間や地元協力者との間でたびたび議論をしてきた。その上で、大地の芸術祭会期中に茶の湯の専門家である表千家講師の岡田宗凱氏を招聘し、「からむしの部屋project」内部において茶会を開催した。「からむし（和苧）」の布が織りなす空間の軽快さと清廉さに加え、からむし茶と抹茶を使った茶会ワークショップにより、文化的重層性が創出された。

○地域ブランディング会議兼プロダクトデザイン検討会

開催日時：3月5日（土） 18:00～20:00

開催場所：新潟県十日町市伊達地区

参加人数：11人（スタッフ2人、都内在住のデザイナー1人、地域住民8人）

開催概要：地域ブランディングを前提として、若年層にも親しまれるプロダクトデザインを検討するため、新たな素材の検討を地域住民と共に実施した。その上で、新たな素材の実験の場として「伊達のつつじ原」の使用許可と杉林利用の可能性について議論し、次年度以降、試験的に立木染色を行う事となった。

3. 4 結果と考察

○草木染めワークショップに関して

内容：「からむし染めワークショップ」を深化させ、「草木染めワークショップ」として実施する事で、地域住民に対してより身近な地域資源が多くある事に気づきを与えた。また、水沢小学校の全面的な協力を得て、「総合的な学習の時間」に地域資源である「からむし（和苧）」を採用して頂いた事は、地域学習的な観点からも大きな前進と言って良い。

成果：

- 1) 地域づくりの担い手育成を現実的に実現できた。
- 2) 地域との連携を構築できた。
- 3) 「からむし（和苧）」を基点として、様々な地域資源へ光を充てる活動へと深化を遂げた。

○茶会を通じた新たな価値の創出に関して

背景：

前年度および今年度行ったワークショップや、今年度展示した大地の芸術祭によって、「からむし（和苧）」啓発活動を実施してきた。一方で、「からむし（和苧）」で出来た布の染色する単一的な啓発方法の限界を感じていた。その中で、ワークショップ中に参加者からも意見を募り、「からむし（和苧）」の発信方法について再考を重ねてきた。その中で、「世界茶会」を開催する岡田宗凱氏と出会い、茶会の開催に至った。岡田氏は新たな茶室空間の模索し、「まちづくりユニットドーヴ（doobu）」側は、「からむしの部屋」の新たな空間利用方法の模索を行った。双方にとって有益な試行的な取組みとなったばかりか、地域内の参加者へ非日常的な体験を通じた「からむし（和苧）」の魅力を発信する事ができた。

内容：

芸術祭会期中に来訪者への声掛けや、地域住民への回覧板等での告知によって参加者を募り、スタッフ管理のもと茶会を実施した。麻である「からむし（和苧）」の存在そのものを知らなかった参加者や、織物の材料以外にも染料として使える部分（葉）がある点、絞り染めの方法、自身が作成した模様を染めるマール染めの方法について学習した後、「からむし（和苧）」で作られた空間で茶を楽しむ体験を提供した。和服で参加する地域住民も多く、非日常的な体験を通して「からむし（和苧）」の魅力を再発見し、また茶室空間としての「からむし（和苧）」の可能性を気づかせることが出来た。結果として、5回の開催で20人が参加し、岡田氏と季節ごとの開催について話を進める事が出来た。

成果：

- 1) 他の芸術活動を行っている主体に対して、「からむし（和苧）」が作り出す空間は魅力的であることが再認識できた事に加え、こうした芸術活動とのコラボレーションによって、効果的な啓発が出来ることを我々自身が認識できた。この経験を踏まえ、次なる活動の展望や課題を改めて確認・発見できた点は大きかった。
- 2) 普段の草木染めワークショップには参加していない層へのアプローチが実現した。十日町市の地域資源である「からむし（和苧）」の啓発活動に繋がった。
- 3) 全国的な注目を集めつつある「世界茶会」との良好な関係を築く事に成功し、次年度以降も継続した事業へ向けて組織としての人材の確保ができた。

○地域ブランディング、プロダクトデザインの展開に関して

内容：

前年度からのワークショップや世界茶会での成功を踏まえて、表現そのものも「からむし（和苧）」で作られた布の染色に限らず、複合的に行う必要性を実感している。その上で、十日町市の地域住民に対して有効な地域資源のヒアリングを行ってきた。これにより、ツツジやシソ、ウコンといった天然素材の染料化を実現できたが、さらなる地域ブランディングを押し進めるため、デザイン力を活用して若年層やその他世代の人たちへ普及することができないかと施策した。その結果、「からむし（和苧）」と同様に地域内での利用価値が減退している、十日町杉の利活用について地域協力者の理解を得る事に成功した。そして、地域協力者が管理する「伊達のつつじ原」の間伐材利用の許可をいただき、立木染色の実践を行う試験場と機会を得た。

以上を通して、からむしのみならず木材も利用し、若者やその他世代の人たちへ向けたプロダクト制作の可能性を見いだした。また、都内からデザイナーも参加していた事により、小物（名刺入れ、巾着袋、等）の作成に関して次年度以降展開する、より具体的なアイデアを引き出すことができた。

成果：

- 1) 染める技術について、布以外への可能性を見だし、デザインに幅が生まれた。
- 2) 地元協力者とのさらなる連携を構築できた。
- 3) デザイナーとコラボレーションする可能性を見いだした。

4. まとめと展望

4. 1 活動継続の方策

これまでの6年間に渡る研究活動を通して、「からむし（和苧）」は地域に根ざしたものと発展を遂げてきた。そこで、「からむし（和苧）」の更なる啓発活動を行うため、地域産業を創出する事を目標としている。そのためにもプロダクトに関する研究開発を速やかに進める必要がある。特に、購買意欲と情報発信力を持つ女性層を対象とした商品開発を加速させて行きたい。その上で、より多くの人々に対して「からむし（和苧）」に関する理解をより深めてもらう機会を創出する。そのためにも、FSの一環として、ファンドレイジング等の金融手法を用いて、マーケティングを実施したい。加えて、これまで構築してきた地域住民との連携をより密に行い、地域に還元できる仕組みをより一層構築していきたい。

4. 2 課題と展望

地域活性化を実現するためにも、地域ブランドとしての「からむし（和苧）」の確立が必要である。地域ブランドの確立に際しては、行政機関（十日町市）との協働を一層図っていきたい。また、地域の若年層に対して「からむし（和苧）」の理解を深める活動もより一層展開していきたい。

中山間地域には定住人口の促進という定常的な課題を抱えている。その解決には、地域に安心して長く住み続けられるだけの魅力的な職業確保や選択可能な職業構築が優先課題であると理解している。そのためにも地域産業としての「からむし（和苧）」の幅広い展開を今後も模索していきたい。近年、地域づくりに関する担い手育成の観点からは、「半農半X」というキーワードが話題となっている。そのような点からも「半農半からむし（和苧）産業」が成立するロールモデルの構築を図りたい。

また、地域資源オーラルヒストリーアーカイブを実施したい。地域資源とは何も「からむし（和苧）」のようなモノに限らない。我々は住民（ヒト）も地域資源であると捉えている。特に、第一産業を生業としている住民は場所との繋がりが深い。そこで、それら住民を対象としたオーラルヒストリー実施する。手法としては、各地区5～10名程度を対象として10分程度の動画を製作し、アーカイブ化を試みる。新しい郷土史としての価値を創出したい。